



說

小

徽

著 聲 秋 田 德

版 藏 社 潮 新

明治四十五年一月三日印刷
明治四十五年一月七日發行

(定價金五拾五錢)

著作者 德田秋聲

發行者 佐藤義亮

東京麹町區飯田町
三丁目二十五番地

印刷者 佐々木俊一

東京市神田區
中猿樂町四番地

不許複製製



發行所

東京麹町區飯田町
三丁目二十五番地

新潮社

電話(番町)二、二二三番
振替(東京)一、七四二番

(所刷印舍光秀)

漱

徳田秋聲

一

笹村が妻の入籍を済すましたのは、二人のなかに産れた幼児の出産届と、漸く同時くらゐであつた。

家を持つといふことが唯習慣的にしか考へられなかつた笹村も、其頃はんとしたらず半年弱の西の方の旅から歸つて來ると、是迄長いあひだ厭いとや／＼執著してゐた下宿生活の荒さびれたさまが、一層明かに振顧ふりかへられた。彼方あつち此方こつち行李を持廻つて旅してゐる間、笹村の充血したやうな目に強く映つたのは

若い妻などを連れて船へ入込んで来る男であつた。九州の温泉宿では亦無聊に苦しんだ揚句、湯に浸りすぎて熱病を患つたが、時々枕頭まくらもとへ遊びに来る大阪下りの藝者と口を利くほか、一人も話相手がなかつた。

「どう云ふのが好いんのや。私が氣に入さうなのを見立て上るよつて……東京ものは蓮葉で世帯持が下手やと言ふやないか。」笹村が湯に中つて蒼い顔をして一ト先大阪の兄のところへ引揚げて來たとき、留守の間に襟垢のこびりついた小袖や、袖口の切れかゝつた襦袢などをきちんと仕立直しておいてくれた嫂は斯う言つて、早く世帯を持つように勧めた。

笹村はもう道頓堀にも飽いてゐた。齷齪せうそくましい大阪の町も厭はしいやうで、直に歸支度をしやうとしたが、長く離れてゐた東京の土を久振で踏むのが楽しいやうでもあり、何だか不安のやうでもあつた。歸路立寄つた京都では、舊友がその愛した女と結婚して持つた樂げな家庭振をも見せ

られた。

「我々の仲間では、君一人が取残されてゐるばかりぢやないか。」

友達は長煙管に煙草をつめながら、静かな綺麗な二階の書齋で、温かさうな大振おほぶりな厚い蒲團のうへに坐つて、何やら蒔繪をしてある自分持の賞盆を引寄せた。そこからは紫だつたやうな東山の圓ッこい脊が見られた。

「京の舞妓だけは一見しておきたまへ。」友はそれから新樹の蔭に一片二片づゝ残つた櫻の散るのを眺めながら、言ひかけたが、笹村の餘裕のない心には、京都と云ふものゝ匂を嗅いでゐる隙ひますらなかつた。それで二人一緒に家うちへ還ると、細君が敷いてくれた寢所へ入つて、酔のさめた寂しい頭を枕に就けた。

東京で家を持つまで、笹村は三四年住すみ古ふるした舊もとの下宿にゐた。下宿で

は古机や本箱がまた物置部屋から取出されて、口金の錆びたやうなランプが、また毎晩彼の目の前に置かれた。坐りつけた二階のその窓先には楓の青葉が初夏の風に戦いでゐた。

笹村は行がより上、これ迄係はつてゐた仕事を、漸く眞面目に考へるやうな心持になつてゐた。机のうへには、新しい外國の作が置かれ、新刊の雑誌なども散かつてゐた。彼は買つけの或大きな紙屋の前に立つて暫く忘られてゐた原稿紙を買ふと、また新しくその匂ひをかざしめた。

けど、ざらざらするやうな下宿の部屋に落著いてゐられなかつた笹村は、晩飯の膳を運ぶ女中の草履の音が、廊下にはたたくする頃になるといらくするやうな心持で、ふらりと下宿を出て行つた。笹村は、大抵これまで行きつけたやうな場處へ向いて行つたが、何處へ行つても、以前のやうな興味を見出さなかつた。始終遊びつけた家では、相手の女が

二月も以前に其處を出て、根岸の方に世帯を持つてゐた。笹村はがらんとした其樓の段梯子を踏むのが慵げであつた。他の女が占めてゐる其部屋へ入つて、長火鉢の傍へ坐つてみても、可憐なつかしいやうな氣もしないのに失望した。聞なれたこの里の唄や、廊下を歩く女の草履の音を聞いても心に何の響も與へられなかつた。

「山田君が今度建てた家の一つへ、是非君に入つて頂きたいんだがね」と友達に勧められた時、笹村は悦んで承諾した。

二

その家は、笹村が少年時代の學友であつて、頭が悪いのでその頃までも大學に籍をおいたゐたK―が、國から少し纏つた金を取寄せて、東京で永遠の計を立てるつもりで建てた貸家の一つであつた。切拓きりひらいた地

面に二棟四軒の小體な家が、漸く壁が乾きかゝつたばかりで、裏には鈹屑などが、雨に濡れて石炭殻を敷いた濕々じめぐする地面に粘著へはりついてゐた。

笹村は旅から歸つたばかりで、家を持つについて何の用意も出来なかつた。笹村は出京當時世話になつたことのある年上の友達が、高等文官試験を受けるとき、その試験料を拵へてやつた代りに、遠國へ赴任すると云つて置いて行つた少許りのガラクタが、其男の親類の家に預けてあつた事を想ひ出して、それを一時凌ぎに使ふことにした。開ける時キィキィ厭な音のする安簞笥、そんなものは、うんと溜つてゐた古足袋や、垢のついた着物を捻込んで、まだ土の匂ひのする六疊の押入へ、上と下と別々にして押込んだ。摺減すりへつた當り棒、縁のさゝくれ立つた目簾、繪具の赤々した井などあつた。

長いあひだ胃弱に苦んでゐた笹村は、旅から持つて歸つた衣類を何處

かで金に換へると、醫療機械屋で電氣器械を一臺買つて、その剩餘で、こま／＼した色々のものを、時々提^さげて歸つて來た。

机を据ゑたのは、玄關横の往來に面した陰氣な四疊半であつた。向には、この新開の町へ來て此頃開いた小さい酒屋、鹽煎餅屋などがあつた。斜向^{すまじか}ひには古くからやつてゐる機械鍛冶もあつた。鍛冶屋からは、終日機械をまはす音が、切斷^{ひききり}なしに聞えて來たが、笹村はそれを煩^{うるさ}いとは思はなかつた。

下谷の方から來てゐた、よい／＼の爺さんは、使步行^{つかひあるき}をさせるのも慘^{みじめ}なやうで、直に罷^やめてしまつた。

「あの書生達は、自分達は、一日ごろごろ寢轉^{ねころ}んでゐて、この體^{からだ}の不由な老人を不斷^{ふだん}に使ひやがつて爲様がない。」

爺さんは破けた股引をはいてよち／＼使あるきに出ながら、肴屋の店

へ寄つて愚痴をこぼしはじめた。

「あの爺さん爲様がないんですよ。それに小汚くて爲様がありませんや」肴屋の若衆は後で臺所口へ來て、その事を話した。

笹村は黙つて苦笑してゐた。

友達の知合の家から、直に婆さんが一人世話をしに來てくれた。

友達の伯母さんが、その女をつれて來たとき、笹村は四疊半でばかんとしてゐた。外はもう夏の氣勢けいふで、手拭を肩にぶら下げて近所の湯屋から歸つて來る、顔の赤いなせな頭かしらなどが突かけ下駄で通つて行くのが窓の格子にかけた青簾あをすだれ越しに見えた。

婆さんを紹介されると、笹村は、「どうぞよろしく。」と叮嚀に會釋をした。

武骨らしい其婆さんは、餘り東京慣れた風もなかつたが、直に荒れて

ゐた臺所へ出て、其處らをきちんと取片附けた。そして友達の伯母さんと一緒に、糠味噌などを拵へてくれた。

晩飯には、青豆などの煮たのが、井に盛られて餉臺ちゅうだいのうへに置かれ、几帳面に掃除されたランプの灯も、不斷より明るいやうに思はれた。

こゝに寢泊ねまりをしてゐた友達と、笹村はぼつ／＼話をしながら、箸を取つてゐた。始終胃を氣にしてゐた彼は燻くすんだやうな顔をしながら、食べるあとから腹工合を氣遣つてゐた。

直に婆さんに被きせる夜の物などが心配になつて來た。友達は著てゐた蒲團を押入から引出して、

「これを著てお寢やすみなさい」と二疊の方へ顔を出した。

婆さんは落著のない風で、鐵板落おりきおとしの汚ない長火鉢の傍そばに坐つて、いつまでも茶を呑んでゐた。

「いゝえ私は一枚で澤山でござんす、もう暑ござんすで……。」

三

笹村の甥が一人、田舎から出て來た頃には家が狭いので、一緒にゐた深山みやまと云ふ友人は同じ長屋の別の家に住むとなつた。如何なる場合にも離れるとの出来なかつた深山には、笹村の旅行中別に新しい友人などが出来てゐた。生活上の心配をしてくれる或先輩とも往來してゐた。歸京してからの笹村は深山と一緒に住つてゐても、何處か相手の心に奥底が出来たやうに思つた。可也な収入もあつて、暮に旅へ立つとき深山の生活状態は酷く切迫してゐるやうであつたが、笹村の心は、曾て漂浪生活を送つたところのある大阪の土地や、そこで久振で逢へる兄の方へ飛んでゐて、それを顧みる餘裕がなかつた。深山が荷造りの手傳などとしてくれ

るのを、當然のとのやうに考へてゐた。今度歸つて來ても、矢張それを氣附かずにゐた。けれど深山が、自分にはかり調子を合してゐないことが少しづつ解つて來た。

「笹村には僕も随分努めてゐるつもりなんだ。今度の家だつて、あの男が寂しいから居てやるんだ。」

こんなことが、ちよいと此處へ來て飯を食つたり、徹夜話よとほしに耽つたりして行く、或男を通して、笹村の耳へも入つた。笹村には甥の來たのが、丁度二人が別々になるのに好い機會のやうに考へられた。笹村には思つてゐるを餘り顔に出さないやうな深山の胸に横はつてゐる力強い或ものに打突ぶつかつたやうな氣がしてゐた。笹村が時々憤懣ぶりくして、深山に衝突ぶつつかるやうな事は稀しくもなかつた。

深山は古い笹村の一閑張の机などを持つて、別の家へ入つて行つた。

そこへ、此家を周旋した笹村の友達のT氏も、駒込の方の下宿から荷物を持込んで、共同生活をするようになった。そして、二人は飯を食ひに、三度々々笹村の方へやつて來た。

甥が着いたその晩に、家主のK―やT―、深山も一緒に來て、多勢持おほぜいもち寄つたものを出合だしあつて、減多汁うたじろのやうなものを拵へた。

臺所には、總てに無器用な婆さんを助けに、その娘のお銀といふ若い女も來て、買物をしたり、お汁の加減を見たりした。

「私わしあ甘あまうて……」と、可愛らしい顔を赧くして、甥が眉根を擡しかめた。

「笹村君は、これでもう何年になるいな」と、健啖家のT―は、肺病を患つてから、脊骨の丸くなつた脊せなかを一層丸くして、止度とめどもなく腕を替へながら苦笑した。彼は肺のために大學を休んでから、もう幾年にもなつた。その時は、丁度色々な調査書類などを鞆につめて、一二年視學をし

てゐた小笠原島から歸つたばかりであつた。

「作かね。」

笹村も擦つたいやうな笑方をした。而して長いあひだの習慣になつてゐる食後の胃の薬を、四疊の机の抽斗から持つて來て、茶碗の湯で嚥下した。それが少し落着くと、曇つたやうな顔をして、後の窓際へ寄りかゝつて、パイレーツを舌の痛くなるほど續けて吸つた。

衆は食飽きて氣懈くなつたやうな體を、窓の方へ持つて行つて、夕方の涼しい風に當つた。

やがてお銀が、そこらに散らかつたものを引取つて行つた。

お銀が初めてこゝへ來たのは、つひ此頃であつた。ある日の午後、何處かの歸りに、笹村が硝子製の菓子器やコップのやうなものを買つて、

袂へ入れて歸つて來ると、茶の室の長火鉢のところに、素人とも茶屋女

ともつかぬ若い女と、細面ほそおもての瘦形やせがたの、どこか小僧氣の取れぬ商人風の少わかい男とが、駢ならんでゐた、揉上もみあげの心持長い女の顔はぼき／＼してゐた。銀杏返の頭髮あたまに、白い櫛を挿して、黒繻子の帶をしめてゐたが、笹村のそこへ突立つた姿を見ると、笑顔で少し前すみで、丁寧ていねいに兩手を支たいた。

「……母がお世話さまになりました。」

四

近所で表へ水を撒まく時分は、二人は挨拶をして歸つて行つた。

「ちよツと好い女ぢやないか」

笹村が四疊半の方で、其時また一緒に居た深山に話しかけると、深山は「むゝ」と口のうちに言つた。

「あの男は。」